灸師は診断はできませんが、病態を推測して説明し、なぜ、このような治療をするのかを理解してもらうことに重点を置きます」

初診時には、鍼治療やお灸は弱めの治療しかしない。そのうえで患者に宿題を出す。たとえば、腰痛を訴える人の多くは日常生活での「姿勢」に問題があるか、精神的な問題を抱えているか、どちらかだという。そのことを指摘し、生活の見直しをアドバイスする。お灸を勧めることも多い。

「何日か様子をみれば、体に何か変化が表れるはず。その変化の内容を電話で教えてもらいます」

予想したような効果がなければ、再び来院してもらって、前回よりも刺激量を少し上げて、通常の治療に近づける。そこで変化がなければ、治療計画を見直すという。最初の段階で予想したような体の変化があれば、電話で「その調子。あとは自分で治せますよ」と伝える。

「患者さんがなるべく治療院に来なくてもすむようにするのが私の仕事です。商売の観点からは、あまり得策ではないかもしれませんが、これが私の信念ですから、変えるつもりはありません」

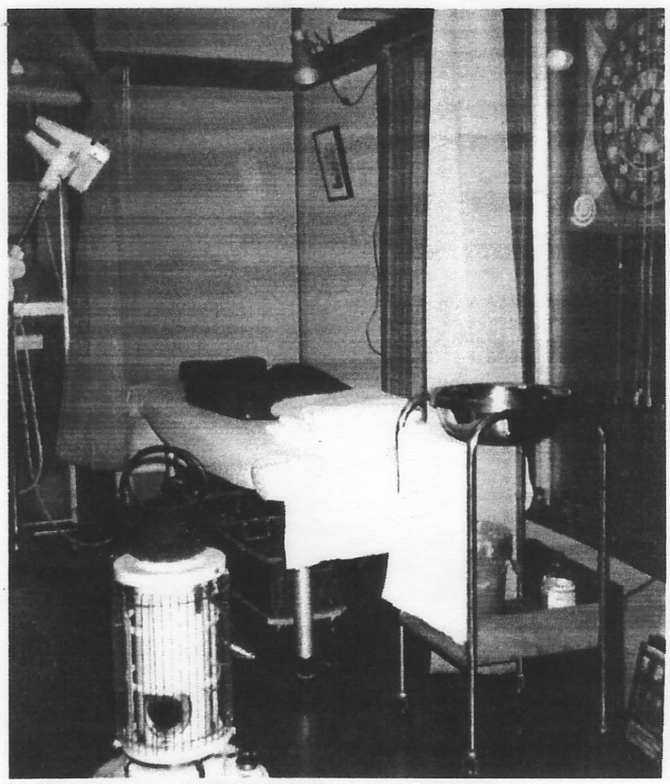
とトーマスさんは言い切る。

共感してくれた人が、また何か別の症状が出たときに、やって来てくれればそれでいいのだという。鍼灸院とは別に翻訳の仕事で生計を立てているため、こうした姿勢を貫けるのかもしれない。

## 日本の医師よ、基本を忘れないで

信念の人だけに、医師の診療に対して厳しい意見を持っている。たとえば、こんな例があったという。

語学学校に勤務する米国人男性Aさん(33)が腰痛を訴えて来院した。



建物は古いが、治療室はフローリングで清潔。旧式のストーブと鉄瓶になんだか癒やされる

トーマスさんは初め、通勤電車に揺られているときの姿勢に問題があるのではないかと推測し、アドバイスを送りながら、鍼とお灸で治療をした。が、症状はよくならない。治療のポイントを変えて何度か試みたものの、むしろ症状が悪化している様子だったという。

「背中のところにマジックで印をつけて、『この部分にがんがある疑いがある』とAさんに告げました。日本人の場合は、相手によって配慮した表現も必要ですが、米国人だったのでストレートにそう告げたのです」

Aさんはすぐに病院で検査を受けたが、何も異常は見つからなかった。痛みが強いので硬膜外ブロックという方法で痛みを止めようとしたが、あまり効果がなかった。そうこうするうちに3カ月がたち、Aさんは下肢が麻痺してしまった。あわてた病院の医師がもう一度X線検査をやり直したところ、がんが見つかった。

「最初の検査で胸部と腰部のX線検査をしたようですが、二つの検査のちょうど隙間の位置にがんがあったのです。それは、私がマジックで印をつけた位置でした。本気でがんを疑っていれば、最初の段階で必ず見つけることができたはず。検査機器がなくても予想のつくことをどうして医師が見分けられないのか」

また、こんな例もあった。狭心症で入院したおばあさんが、退院した1カ月後に腰痛を訴えた。往診を頼まれたトーマスさんは、おばあさんのおなかのあたりに大きな腫瘍があるのを見て驚いた。すぐに別の病院に行って精密検査を受けるように勧めたところ、がんであることがわかったという。

「入院中すでに腫瘍があったと思います。医師も患者さんの体を目で見るという基本を忘れないでほしい。鍼灸師は私の天職。これからも『職人』のプライドを持って、患者さんの健康な生活に役立ちたい」

とトーマスさんは話している。

なお、診療希望者は予約電話(☎046・876・3077)を入れてほしいという。

[竹内義朗]

第一線ルポ

# 商売抜き、信念を貫く異色鍼灸師

## 「患者が来ないようにするのが私の仕事」

**トーマス・ブラーゼイエーヴィッツ**

トーマス鍼灸院（神奈川県葉山町）院長

1956年、ドイツ生まれ。79年に来日、日本鍼灸理療専門学校卒。日産玉川病院での研修を経て95年に開業。

「次はいつ来ればいいでしょうか」と患者が聞くと、

「なるべく来ないように」

と答える。そんな風変わりなドイツ人の鍼灸（しんきゅう）師がいるというので、神奈川県葉山町を訪ねた。温暖な葉山でも小雪の舞う寒い日。鍼灸院のドアを開けると、旧式の石油ストーブが目に入った。上に置いてある鉄瓶からシュンシュンと湯気が立ち上っている。

「ようこそいらっしゃいました」

流暢な日本語で出迎えてくれた院長のトーマス・ブラーゼイエーヴィッツさん。ひげがよく似合う、優しい目をした人だ。

ドイツに生まれたトーマスさんは子供のころに柔道や合気道を習い、東洋的な思想や哲学にも興味を持った。17歳のとき、テレビで弓道の老師が弓矢を引き絞る姿を見てその美しさに感動し、日本への旅立ちを決意したという。

その後、徴兵制を拒否して福祉の仕事に就くなど紆余曲折を経て、1979年、22歳のときに来日を果たした。ドイツ語を教えたことが縁で日本人女性と結婚し、永住することになった。

どうせなら、大好きな東洋思想に基づいた仕事がしたいと思い、鍼灸の専門学校に入学、鍼灸師の国家資格を取得した。その後、故・代田文彦医師（前・東京女子医科大学附属東洋医学研究所所長）に師事、日産玉川病院で臨床研修を受けた。

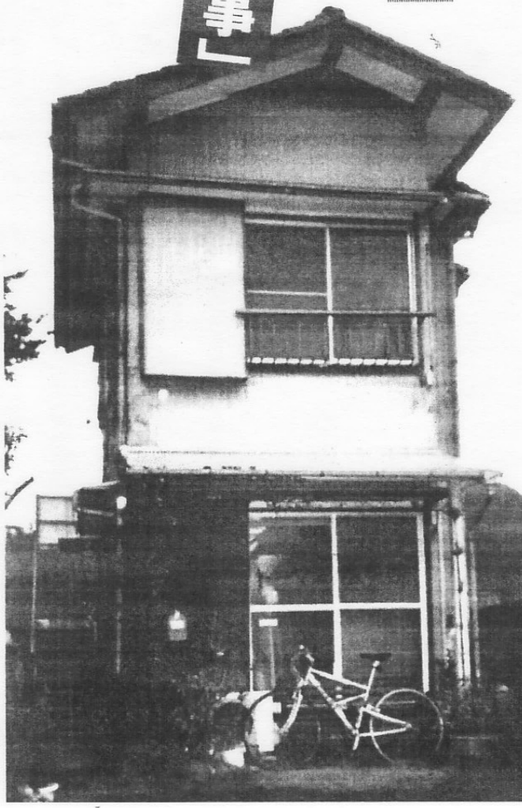
「この病院にいた4年間で、私は大きく成長しました。そもそも私はエリマキトカゲみたいな存在。物珍しさから、私に興味を持つ人が多く、ずいぶん得をしました。お願いすると、どうぞと治療現場を見学させてくれたり……。ドイツ語だけでなく英語も話せるので、救急車で外国人が担ぎ込まれると、すぐに呼び出しがかかりました。救急患者に鍼灸の出番はありませんが、医療行為を間近で見ることが勉強になりました。当直の手伝いも積極的にやったので、どの科の医師からも学ぶことができて、充実した日々でした」

こうして経験を積んだトーマスさんは95年に開業の道を選んだ。鍼灸院といっても、古いアパートの一室。無理な投資をしてつぶれるより、長く続けられる、身の丈にあった場所を探したという。4畳半ほどのキッチンが待合室で、6畳ほどの治療室にベッドが2床置いてある。木目のインテリアで安らぎのある空間だ。

### その調子。あとは自分で治せます

初診時は問診に20～30分の時間をかける。症状、病態を把握し、治療計画を立てて患者に説明する。

「初診時は治療というより入門。鍼



古い建物の1階部分が鍼灸院。エコロジストのトーマスさんは、窓の手前の自転車を愛用